

「今、私の晴雨計は！」⑧

年頭雑感

わが七回目の干支の幕開けです

平山 征夫

間私も来年からしようと考えたが「一昨年の小椋佳の生前葬コンサートも少し早すぎたな」と思い出し、止めることにした。

随筆執筆の間が開いて二月になってしまった。早く新年の挨拶をと思いなながら、年末は年賀状と公職（好色ではない）の会報等への新年のあいさつ文の執筆に追われていた。どちらも結構分量が多く大仕事だ。それに比べ新年は執筆するものは少ないが新年会、入試、授業の試験・採点と相次ぎ結構忙しい。年賀状と言えは同級生から「当方高齢につき今後年賀のあいさつを失礼します。便りのない間は生きていますとお受け止めください」というのがあった。瞬

書けなかった言い訳はこのくらいにして、新年の想いを遅くなったが述べてみたい。本年の干支は申、わが干支である。それで張り切ったわけでもないが、この年末・年始は富士山を見ながら過ごした。申し込んだホテルが意外と両方取れたので、年末は山中湖、年始は箱根・仙石原で過ごした。その間好天続きで日の出の赤富士から夕日のダイヤモンド富士まで富士を堪能した。ただ、ずっと富士をカメラで追った感想は、「美人は写真にしにくい」の一言だった。近すぎるとあばたも見える。何よりも大きいのと、比べるものが

ないのでただ富士を撮っている感じになってしまふ。以前、新潟から大阪に向かう飛行機の中で雲の上に飛び抜けた姿や、ほかの山並みを圧倒している姿を写真に収める幸運に巡り合ったが、この方が富士の姿の流麗さと高さが強調されて美しかった。富士も夜目、遠目のようだ。いずれにしる富士を見ながら気持ち新たにするのは格別だ。親父の様に一度やってみたいと思っている元旦朝の家族への訓示は今年も出来なかった。そればかりか、逆に奥さんと娘より沢山訓示を頂いた。

「比べるほうが分かりやすい」と書いてあることを思い出した。ここ数年新年の休みには「資本主義論」関係の本を読み漁っているが、そうした過程で知った「ヴェブレン」という米国の経済学者がいる。ケインズより少し前にその先駆けになる経済理論を唱え、併せて優れた教育活動をした人だが、何よりも一九二九年の世界恐慌を予告して、その二か月前に亡くなったことで有名だ。その時彼は「人間という動物は、絶対的レベルで満足できず、相対的豊かさでしか満足しない。だから今の株式市場はバブル化し、早晚破裂するだろう」と忠告したのだ。他人と比べて自分が優位にあれば満足する欲望りな人間は、グローバルゼーションの進展に伴う格差拡大や貧困・テロ激化の問題など今年も難しい事態を沢山惹き起こしながら歴史を刻むのだろうか。申歳は荒れるといわれるので心配だ。

（平成二十八年二月五日）